

短歌

〈文芸祭賞〉

大津市 近江堇花

踊りの輪少し外れて車椅子

押せばゆつくり母の手の舞う

〔評〕

地域の盆踊りでしょうか、それとも郡上踊り?お母さんの車椅子を押して盆踊りを見に行く。ふと気が付くと母親の手がゆづくと動いている、いや、ただ動かしているのではなく、盆歌に合わせて踊っているのだ。若き日にはあの輪の中で踊っていたであろう母親の姿が彷彿とする。車椅子の母親への愛情溢れるまなざしがしみじみと温かい一首になりました。

〈優秀賞〉

安曇野市 穂苅 真泉

極細の硝子ペンにて手紙書く

青のインクが夏を呼んでる

〔評〕

文房具というより、繊細な芸術品のような硝子ペンの美しさに魅了される人が増えているそうです。万年筆に比べて手入れが簡単で色々なインクが楽しめるからという。作者は極細の硝子ペンで手紙を書く、青いインクで夏を呼ぶように。若さと爽やかさを感じさせます。三句目を「書く手紙」とすると、手紙に焦点があたる一首ですね。

りなめらかに下句につながるのでは。

辛き過去忘れし母の手をとりて

またねと言えばお辞儀をされぬ

〔評〕

単に「過去を忘れた」のではなく、「辛き過去」と書くことによって現状を肯う思いが読み取れます。お母さんを訪ねても手を握ることしかできないのかもしれませんね、そして「またね」と言って帰ろうとすると母親は他人行儀にお辞儀をする。感情をいれない事実のみの結句が作者の深い悲しみを余すところなく表現しています。

〈秀作賞〉

関市 篠田 理恵

追伸のためだけに書く水色の 手紙の封をゆつくり閉じる

〔評〕

相関歌でしょうか。色々と書き送ったあと本当に言いたかったことを書く、追伸として。「水色」という寂しさを感じさせる色が、もしかしたら別れを告げる手紙?と思われます。いろいろ想像させるところがいいと思います。結句に作者の想いが込められています。若き日の思い出の一ページになるのでしょうか。

阿南市 典典

春日部市 泊雲

〈審査員作品〉

藤田 正代

美濃菊の見事に咲いた鉢抱え

玄関に置く父は喜寿過ぐ

〔評〕

雅やかな大輪の美しい美濃菊は、羽島市正木町の大田正吾氏が改良した、丸花弁の珍しい菊で市の花に制定されています。羽島市には栽培されているかたも多いのでしょう。作者のお父さんはその菊の愛好家で、丹精こめて咲かせた菊を皆に見てほしいと鉢を抱えてきて玄関に飾ったのですね。喜寿をすぎて元気で菊づくりをしている父親を優しく見つめる気持ちが結句に端的に表現され、温かい思いの伝わる作品です。

各務原市 村松 陽子

卒寿まで生きたいというわが母を
曾祖母にする小さき命

〔評〕

九十歳まで生きたいと言っていた母親がついにひいおばあちゃんに。きっとこれが生きたいと願った理由だったのでしょう、よかったです。赤ちゃんの誕生は少子化問題などとおおげさに考えなくとも、誰にとっても喜ばしいことだと思います。このお歌は、小さな命の側から詠つているのがユニークでいいと思います。

夕やけがきれいと庭に誘ひて

娘はひとときを母のやうなり

送られし淡竹を炊きて娘の帰り

までば梅雨入りまえの暑さよ

真夜覚めて雨音を聞くしまらくを

施設暮らしの弟おもふ

松野 律子

旧姓が残る歳時記開くとき

姉住むみなみの海鳴り響く

穂すすきの波打つ河原に車止め

海は見えねどしばし立ちおり

捌く手間捨てる粗^{あら}無く焼いてる

四角い切身の冷凍の鯖

【総評】

令和六年度の羽島市文芸祭「短歌」一般の部の応募数は一九一首（応募者数は七二人）でした。今夏は猛暑やオリンピックなどが印象に残っていますが、それらを題材にしたお歌が見られないのはなぜかなどと思いましたが、締切日が七月三十一日だったせいかと気が付きました。

歌材として多かったのは、やはり家族で次に身近な自然、社会の順になっています。家族、つまり祖父母、両親、兄弟、子や孫、友人等々愛情をもつて見つめる対象を詠むとき、読み手に訴える力のある作品が生まれるのだと思いました。

また、日々変わっていく世相を捉えて詠んだ作品も散見されました。「クーリングシェルター」「インバウンド」「セルフレジ」等々。「クマ出没」「温暖化」「ウクライナ」「バレスチナ」「ガザ」などニュースに頻繁に登場する言葉も。ただこれらの言葉を自分独自の切り口で、自己の体験、思いとして一首に出来ればいいと思いました。

今回上位の作品六首に、期せずしてお母さんを詠んだ作品が三首入りましたが、前述しましたとおり、老いてゆく母親に慈しみに満ちた眼差しを注いでいることが、読み手の心を打つ作品を生み出すもとにになったからだと思います。

応募作品全体を見て、読み手に伝えたいことはなにかを、簡潔に明確にしたほうがいいのではと思われるお歌が多かったこと、漢字で書ける文字をすべて漢字で書かず、漢字とひらがなのバランスを考えてみるとこと、定型の韻律を大切にしてほしいことなどを思いました。

来年度はより多くの応募があることを期待いたしております。

評 藤田 正代

俳句

〈文芸祭賞〉

春の雪郵便受をぬらすのみ

大垣市 岡本 艶子

〔評〕

俳句と言つ詩形は、読んだすべての人が納得する内容の作品があると思えば、どうしてこの作品がと疑念を抱く作品もあるかと思います。また、選者の感覚の相違によって選ばれる作品、見過ござる作品と言つものもあります。例えば今回私が文芸祭賞として選んだ「春の雪郵便受をぬらすのみ」についても「どうして?」と思われる方がおられるかも知れません。

この作品で注目すべきは下句の『のみ』の一語です。この一語によって降った雪の様子やその量が暗示されていると申せます。俳句と言ふ短詩は、このように詠み入れた言葉のイメージ力を十分に働かせることによってその世界を描く詩であると申せます。

〈優秀賞〉

奈良市 浦城 亮祐

正直に暮らしています菊の花

〔評〕

俳句は基本的に物をベースとした詩であると言えますが、掲句について申せば「物」ではなく「想い」をストレートに示しています。その

表し方が作品の強みであると同時に弱みになっていると言つてよろしいでしよう。しかし、俳句であつてもときには正直な心の叫びを示してみたいと言つ衝動に駆られます。この作品はその衝動がうまく活きた一句であると申してよろしいでしよう。

祈りの手開くかたちに蓮の花

安曇野市 穂苅 真泉

〔評〕

この句については、比喩をうまく生かした表現が成功していると申せます。比喩の難しさは、意外性と同時に納得させる力を持つ必要があります。そうでないと読み手に伝わり難いと申せましょう。そうした観点からこの一句はストンと腹に納まると申せます。

〈秀作賞〉

桑名市 小林 寛久

キャッチャーのサインは勝負玉の汗

〔評〕

バッターは強打者であったかも知れません。それに対しキャッチャーハ「逃げるな。勝負だ」のサインを送つて来ました。将に息詰まる一瞬を示した作品です。

練馬区 高瀬さえら

〈審査員作品〉

夕焼けを使い果たして部活の子

〔評〕

日暮れが迫ってきた時間を「夕焼を使い果たした」と捉えた感覚が素晴らしいと思います。部活に対する生徒たちの熱心さに感銘させられます。

岐阜市 安田 一義

麦秋や一揆の村の隠し畑

〔評〕

古人は知恵を絞つて食料生産に勤しんだことでしょう。「一揆の村」と「隠し畑」の取り合わせに感銘しました。

海流のぶつかる匂ひ帰り花
川に沿ふる難に沿ふる

裏返すたびかがやける子猫かな

権 未知子

清水 青風

秋晴れや美濃には美濃の山かたち
連山をもて郷分かつ秋の風

秋深し生地そのまま死地ならむ

【総評】

文学、或いは文芸と言つて良いかも知れませんが、その中で俳句は日本独特の短詩です。ご承知の様に十七音の範囲で季節と作者の思い、或いは作品の地の特性などを詠み入れなければいけません。作品を鑑賞する側としても、そうした作者の意図が表現されてい るかどうかでもって選ばせて頂いております。

今回も心惹かれる作品が多くありました。その一部しかお目に掛けることしかできませんが、佳句の名に値する作品を選ばせていただいたことは自信をもつて申し上げられます。皆様の今後の作句活動の指針となるものを感じ取つて頂ければ、選者としての喜び、これに勝ることはありません。

評 清水 青風

川柳

〈文芸祭賞〉

久喜市 岡田 孝道

倒木を母に新芽が立ち上がる

〔評〕

輪廻転生し、倒れても次世代へ命を繋ぐ。素晴らしいですね！
母は強しでしょうか。

〈優秀賞〉

津島市 藤井 益子

赤い糸いくども補強重ねてる

〔評〕

そうです。日々補強を重ねて今があるのですね。お互いに！

好奇心拾う袋を持ち散歩

〔評〕

好奇心いっぱいの散歩！今日も沢山の宝で袋の中はいっぱいになる
ことでしょう。

秀作賞

東海市 齋藤浩美

戦中派ちび鉛筆が捨てられず

〔評〕

まだ充分使えそうな鉛筆や紙も、ゴミ箱で泣いています。考えなければいけませんね。

員弁郡 水谷裕子

独走の白帆を上げる子の巣立ち

〔評〕

心配ですが、拍手で見送りましょう。頑張れ！と。

八尾市 稲山 常男

ほどほどの無駄を味方に日を畳む

〔評〕

神経張り詰めていたら参ってしまいます。無駄も必要…無事一日が終わりました。

好奇心拾う袋を持ち散歩

〔評〕

好奇心いっぱいの散歩！今日も沢山の宝で袋の中はいっぱいになる
ことでしょう。

〈審査員作品〉

今井 極子

【総評】
川柳は人間を詠む文芸といわれています。『今』の貴方の思いや『今』の暮らし『今』心から素直に出てくる言葉でしか、作ることができないものです。

ご応募いただいた作品に、様々な人間模様や生活環境を見ることができ、興味深く楽しく選をさせていただきました。お礼申しあげます。

入賞の作品には、人間味や思いがあふれている句を選びました。自然災害や戦争など、暗いニュースもあった年ですが、皆さんの句からは明るく前向きで生き生きとした人生観が感じられました。

文芸はやはり心や人生を豊かにしてくれるものだと改めて気づくことができました。

来年度も皆さまの『今』を感じられるフレッシュな川柳をお待ちしております。

評 今井 極子

南 さと奈

父さんと社長を使い分け自営
二代ペース化つてくる
家業継ぐ息子やさしい目をしてる

ワイルドピッチ捕手のじいじが走れない
夢の欠けら抱いて無念のJターン
相席の男の指がきれいすぎ

南 さと奈

現代詩

〈文芸祭賞〉

お父さん

さいたま市 くるみ

【評】

作者の愛惜の心がにじみ出でている詩作品です。

「あんなこと 言わなきやよかつた」

と繰り返される言葉に素直な作者の心を垣間見ることができます。

人生で起こりうる喪失感、父に対する愛が作者の視点を通して描かれていて、「約束も忘れ」「勝手にプリンを食べてしまう」父の顔を今は見たい、声が聞きたいといつ呼びが素直に響きます。

技巧的というよりも全体的に詠嘆的描写になっています。印象に残る作品です。

あんなこと
言わなきやよかつた
オバケが怖いなんて
言わなきやよかつた
遠慮するなんて
思わなかつた
ノックしないで部屋に入つてきたり
勝手にプリン食べちやう人だつたし
顔くらい見せてよ
いつかみたいにすつとぼけて
声くらい聞かせてよ
あの頃みたいにいたずらつぼく

〈優秀賞〉

夜の鉄路

桑名市 藤川 六十一

二人で、明かりの主を見る
やつて来たのは、父だつた
あとをつけて来たのだろうか
恐怖が、喜びと安心に
三人で、黙つて、家へ戻つた

私が子供であつた頃
深夜に、母に起こされた
寝ぼけ眼で、手を引かれ
着いた所は、鉄路のそば

どこへ行くのと尋ねたら
遠い所と母が言う
遠い所とは、どこだろう
死んで行く所かもしれないな

若い頃、母は、父に嫌われた
冷たくされて、泣く日が続き
母の我慢が、限界を超えた
真夜中に、私を連れて、家を出た

その後、父は病に倒れ
懸命に看護する母に、感謝して
別人のように、やさしくなった
とても仲睦まじい夫婦になった

父との生活は、前半はつらいことばかり
でも、後半は幸せだった、と母が言う
あの真夜中のことを尋ねたら
さあ、そんなことがあつたかね

小さな明かりが近づいてきた
悪い人か、お巡りさんか
母が私の手を握り

少し前、故郷へ行つた時
母と来た、鉄道の現場へ行つてみた
父母は、もう、この世にいなけれど

「ここにも、魂のかけらが残つてゐる

そんなに近づいたら、危ないよ

私達のところへ来るのは、まだ早い

懐かしい声が、よみがえる

空を仰いで、涙ぐむ

〔評〕

故郷と父母に対する思いと「母の我慢が限界を超えた」真夜中に私を連れて家を出た」鉄路のそば。人生の縮図のような作品です。今でも鉄道の現場には「魂のかけらが残つてゐる」ということは、作者にとって過去のできごとではないのです。今でもきっとありありと思い出しができるのです。心の奥に秘めていた魂のかけらを見つめた詩作品に仕上がっています。

1週間

岐阜各務野高校 平光 咲希

2日ぶりにみる君の瞳

週の初めの憂鬱な気持ちが吹き飛ぶ月曜日

友達と喋つてる君の声

内容が気になつて勉強が手につかない火曜日

板書を写す君の姿

見るので集中しすぎて慌てて写す水曜日

部活に打ちこむ君の横顔

普段と違うギャップにドキドキ木曜日

さよならを告げる君の笑顔

2日会えないことに恋焦がれてしまう金曜日

〔評〕

憂鬱が吹き飛ぶ月曜日、手がつかない火曜日、君の姿を見つめる水曜日、ドキドキ木曜日、恋焦がれてしまう金曜日、どれもがかけがえのない青春の一時期です。書くことを通して対象を手放し冷静に見つめることも大切です。ストレートに青春の心を想起させる詩になっています。

〈秀作賞〉

ヘレン・メリルの夜

世田谷区 野上 卓

夜が凍つてついている

私はコーヒーを飲んである

サイフォンで淹れた ハワイ・コナである
ヘレン・メリルが、静かに唄つて
とつておきの時間である

足もとに地球がある

地球は冷えて

地表の虫たちは死に絶えている

少し土を掘り下げれば

浅い眠りの小さな虫が這い出してくるのか
だが、花壇に盛られた泥の下は

厚いコンクリートの土台である

地球は球体で

世界はつながっている

中国ではまだ夕方だ

日本産の霜降り肉に舌鼓を打つ役人出身の資本家と
腐りかけた肉と農薬漬けの葉物が包まれた餃子を貪る農民
戸籍の労働者が

距離をおかずには呼吸している

天安門広場では偉大なる毛主席の写真が微笑んでいる

西を目指せば

イスラム原理主義の若者たちが

機関銃を磨いている

憎しみが金属を美しく装う

女たちが眦(まなじり)を決しているのは
自らが爆弾となる決意をしたからだ

ヨーロッパでは 午前九時

少し寒いが、気持ちのいい朝だ

だが ウクライナでは
ロシアのミサイルがアパートに着弾する

その南にくだらう

ガザではユダヤ教徒の兵士たちが
パレスチナの女こどもを殺している

そしてアフリカ
人類発祥の地だ

昨日 眠った兄弟が今日は起きてこない
飢えや感染症が

当たり前のようにそこにはある
母親の乳房のうえで
今日も嬰児が息絶えている

ああ なんと寒い夜だろう
だれかがテレビをつける
ヘレン・メリルの歌声に
漫才のノイズが重なる

ああ なんという豊かさだろう
なんという静けさだろう

〔評〕

「この三枚の原稿用紙の中に「地球は球体で 世界はつながっている」
世界を描いています。中国、ヨーロッパ、パレスチナ、アフリカと巨視
的な視点と目の前のコーヒーをうまく取り交ぜて表現しています。
「なんという豊かさだろう なんという静けさだろう」という素直な
思いが響いてきます。」

猫

岐阜各務野高校 佐伯 麻衣

熱くはないけど猫舌ぶつて
甘えるように猫なで声で
猫かぶりして君とデートを

誘いを受けても駆け引きしたくて
猫の魚辞退
猫も杓子もは望まない
ただ君ひとりを猫ばばしたい

〔評〕

「猫かぶり」して「ただ君ひとりを猫ばばしたい」という自分の願い。
「駆け引き」で「猫なで声」をして君とデートする現実。日常生活の
中での高校生活。短い表現の中に作者の思いを垣間見ることができます。若者らしい思いが伝わる詩になっています。

亡き父

加茂郡 新井 悠久

口下手で 寡黙な父。
黙々とする作業は得意。
大勢の前で話すのは苦手。
「おりはおりらしくありたい」。
自分の信念を曲げることなく
方言を矯正することなく
古里を愛した父。
だれからも愛され
親しまれた父。
通夜と葬儀には
総勢二百五十人を集めた。
「ええ人やつたのになあ」。
「もつと長生きして欲しかったわ」。
葬儀場の入り口で聞く声には
一つも非難の声がない。
偉大な父の面影が
浮かんでは消えた。
十五歳で父親を亡くし
丁稚奉公に出た父。
うまくいかずに戻つてからは

図書館司書 役場の職員
飴売りなどを転々とし
病院の事務員から
臨床検査技師に落ち着いた。
口癖は「苦労なんてあらへん」。
寡黙だが 芯の強い父だった。

子どもは父を超えるか。
今 自分は試されている。

人望が厚く 情に熱い。
世話好きで 誠実。

寡黙だが 頼れる存在。
父が段階一〇だとすれば
私は幾つだろう。

夜空を仰げばオリオン座。
父が好んだギリシャの英雄。
道程はまだまだ遠い。

〔評〕

「口下手 寡黙な父」であったが、葬儀には大勢の人の参列がありました。実は「人望が厚く 情に熱い 世話好きで 誠実」という一面があつたのです。「寡黙だが頼れる存在」であつたと改めて振り返らせる父の存在があります。

父を偲ぶすぐれた作品になっています。

〈審査員作品〉

踊り場

南向きのわが家には
広いガラスがはめられている
階段を上ると

二つ部屋がある

四十年前この二階の踊り場から
あの人は足を踏み外し
ゆっくりと生と死を濃くしている空間を
落ちていった

手を差し伸べるまもなく

スローモーションを見るかのように
空に浮き
薄暗い闇の中に吸い込まれていった

無音の世界

これは夢か
幻であつてほしい

目をこらすと
ぼんやりと光のようなものが見えた

稻垣

和秋

薄闇色の階段の底で
やわらかな光がうごめいた
生と死から
解き放たれた風が
吹き抜けていった

〔総評〕

今年度は、六十二篇の応募作品が寄せられました。年齢も幅広く応募されて、詩の傾向も、身の回りのこと、家族のこと、自己のこと、生きざまのことを詩として表現されていました。詩は「生涯の文学」でもあり、若い人も高齢者も万遍なく応募がみられました。

詩を通して世界の広がり、深さ、面白さ、認識のすばらしさ、物の本質のとらえ方の深さを学ぶことができます。また、詩を書くことで、自分で見たこと、聞いたこと、心で感じたこと考えたことを見つめ直すことができます。自分なりに解釈して楽しむと、いうこともできます。

一篇の詩には作者のつらく哀しい思い、あるいは感動した思いが隠されています。言葉にならないことを何をテーマに表現するか自分での思いを無駄のない言葉で表現するのです。作者の思いが読者の魂にいかに届くかを吟味することも大切です。

これからも、日常のさまざま驚きの中に隠れている詩情をとらえ、高い作品にしていくください。

評 稲垣 和秋